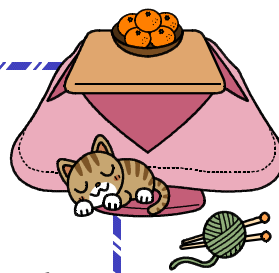


や か た

平成28年12月21日(水)

発行責任者 校長 藤田秀平



プレ・ステップアップテストを実施

ステップアップテストとは1週間ごとに、漢字の読み書き、計算、英単語を10級から1級まで30週にわたって行うテストです。

クラス単位で、平均点、満点率、得点upを競います。



私は、豊間中、玉川中、内町小で、それぞれ3年間(計9年)ステップアップテストを実施してきました。初めのうちはなかなか満点を取る生徒が増えませんでした。1年を過ぎるとほぼクラスの8割以上が満点を取るようになりました。ときには全員満点、パーフェクトのクラスが出るようになりました。その結果、中学校では、高校進学率がほぼ100%になり、全ての生徒が、第1希望で合格した年もありました。小学校では、全国学力調査において著しく向上が見られました。

※ ステップアップテストの効果

私は、左ひざじん帯を痛め1ヶ月ギブスを巻いたことがあります。ももの付け根から足首までで、1ヶ月伸ばしたり縮めたりすることができませんでした。それでも、ギブスが取れば大丈夫だろうと軽く考えていました。しかし、大変だったのはギブスが取れてからでした。太ももの筋肉が半分ぐらいに落ちたのには驚きましたが、それよりも、ひざがほとんど動かないのです。たった1ヶ月、動かないように固定しただけなのに、足の機能が働かないのです。いわゆる、すじがつまって動かない状態です。普通に正座できるようになるまで、3ヶ月かかりました。

ここまで読まれて、だいたいお分かりになったと思います。そうです、脳も同じです。学習にとって大切な脳の機能、正確に速く処理する(計算)。正確に覚える(漢字、英単語)は、毎日使ってこそ機能するのです。腕立てが1回もできない人でも、毎日やれば、必ず100回できるようになります。10回できる人ならもっと早くできるようになります。

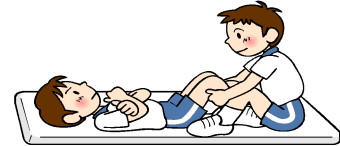
そして、脳の最も重要な機能、「的確に判断する」の土台になるのが、この正確に速く処理し覚える機能なのです。

ここで、腕立てを100回できるようにすることは目的ではありません。腕立てをすることによって、100回腕立てができる筋力はその運動の可能性を広げ、100回続けようとする意志がその運動への意欲を高めます。

腕立てをステップアップテストに、運動を学習に置き換えてお読みください。運動も学習も取り組み方は同じことが分かります。

ステップアップテストで50点満点取ることが目的ではありません。ステップアップテストを通して、正確に速く処理し覚えることができるようになれば、学習の効果も飛躍的に向上します。

※ ステップアップテストの例（漢字9級抜粋）



一 読みを書きなさい。

- | | | | |
|----------|---------|-----------|---------|
| ・ 視界が悪い | （しかい） | ・ 薬を服用する | （ふくよう） |
| ・ 感謝の気持ち | （かんしゃ） | ・ 勤勉な学生 | （きんべん） |
| ・ 和語と漢語 | （かんご） | ・ 感覚がするどい | （かんかく） |
| ・ 在京の球団 | （ざいきよう） | ・ 忠誠をちかう | （ちゆうせい） |
| ・ 局地的な雨 | （きよくち） | ・ 急速な変化 | （きゆうそく） |
| ・ 勝算がない | （しょうさん） | ・ 魚が生息する | （いせいそく） |
| ・ 電話での対応 | （たいおう） | ・ 見識を広める | （けんしき） |
| ・ 文章の要点 | （ようてん） | ・ 自転車の放置 | （ほうち） |

二 漢字を書きなさい。ただし、（ ）には漢字と送りがなを書きなさい。

- | | | | |
|--------|-------|------|-------|
| ・ 省エネを | （はかる） | ・ 川を | （のぼる） |
| ・ 時間を | （はかる） | ・ 木に | （のぼる） |
| ・ 目方を | （はかる） | ・ 湯が | （さめる） |
| ・ 長さを | （はかる） | ・ 目が | （さめる） |
| ・ 悪事を | （はかる） | | |



人生や物事に対する取り組みは、よくマラソンに例えられます。ここで、女子マラソン、バルセロナ五輪銀メダル、アトランタ五輪銅メダルを獲得した有森裕子さんの言葉を紹介します。



トップアスリートのことば～有森裕子（元女子マラソン選手）

（H23. 7. 29文京シビックセンター：全国中学校長役員研修会講演より）

高校3年間で私は国体に出たこともなく、インターハイに行ったこともなく、地域、地方の大会はすべて予選落ちです。実績としてはゼロです。それでもおもしろいもので、入部の際「だめだったらやめい。本当は要らんから。」と言った狩屋先生（就実高陸上部顧問）が大きく変わりました。練習でも試合でも人の後ろにしかいなかった私に、「何しよんなあ。もっと頑張れ。ほら、言うたじゃろうが。やめてしまえ。」と一度たりとも言ったことがない。「やめろ」と言われたこともないです。言われたのは、同じ意味を持つ三つのことば、「アリちゃん、辛抱せい」「とにかく粘れ」「あきらめるな」ということです。「よう聞いとけ。あきらめんかったら、そのうち前のやつが嫌になっていつかあきらめるから、それを待て。落ちてくるから、それを拾えばいいんじゃない。横に並ぶじゃろが。そうしたら今度はにらみつけるんじゃない。もっと嫌になって後ろに下がるから、そうしたら前に出れるんじゃない。それでも勝つ可能性はあるんじゃない。おめえのええところは、全員があきらめるまでおまえはあきらめん。その気持ちじゃ。早う走れんでもそれはできる。とにかく今が辛抱じゃ」「アリちゃん、辛抱」がワンセットでした。あきらめないことの大切さ、「おまえはそれができる」「それが大事なんだ」ということをものすごく言われたのを覚えています。

なぜか。理由はただ一つです。私が一度も手を抜いたことがないという姿を見たことだけです。練習で手加減したことはないです。「きょうはこのくらい」なんていうコントロールをしたことがないくらい、とにかく自分にできる最大の力を出し切るとするのが、私にとっては当たり前のやるべきことだと思っていたので、そういうところを毎日練習で見せていた結果、恩師にそういう言葉を出させたのかなと思います。